

# ホワイトヘッドにおける汎心論 と物理主義

平田一郎

関西外国語大学短期大学部

ホワイトヘッドのコスモロジーの大きな特徴が汎心論 (panpsychism)であることは、言うまでもない。即ち彼は全ての事物は生成する過程として「コト」、生起 (occasion) と見なすとともに、その生起は全て「経験の活動 (act of experience)」とした。そこでは物理的な生起と心的な生起 (その代表的なものが知覚) に本質的な違いはないとされ、全ての生起は客体から主体が生成する過程とされた。椅子を知覚するとき椅子という客体から「椅子の知覚」という「主体」が生成する、この「主体」の生成を「経験」として、物理的事象における原因から結果の生成もまた「経験」であるとした。

それゆえ彼の汎心論は「汎経験主義 (panexperientialism)」と呼ばれるべきものであるが、この点で現代科学の知見を取り入れラッセルなどと同じ科学哲学から出発したはずの彼のコスモロジーが、その有神論 (Theism)と共に、一般の英米哲学の主流から外れる契機となったとも見るができる。

こういった状況に対して、一つの考え方は彼のコスモロジーの「観念論的性格」を積極的に主張することであろう。彼の「汎経験的活動」としての「抱握 (prehension)」が彼の『科学と近代世界』で最初に主張されたのはバークレーの議論を介してであった。実際彼のコスモロジーの汎心論はかなりバークレー的な観念論の装いを取っているかに思われるし、マクヘンリーはそういった観念論的なコンテキストに位置づけることにホワイトヘッドのコスモロジーの積極的な意義を見出そうとする。

しかし人間の経験、心が何らかの脳の生起と密接な関係があるという現実の科学的成果を考えると、そういった脳の生起こそが唯一存在するのであるといった物理主義 (physicalism) は無視できないものとしてある。そして実際少なくともホワイトヘッドのテキストにも脳髄の生起に人間の心を基礎づけていると取れる表現がある。

ここでホワイトヘッドのテキストをより綿密にみると、彼の「経験の活動」である生起は微細なものであるとされ、その微細な「心の生起」が脳髄での微細な物理的生起 (電磁的生起) と何らかの相互関係をなしていると思わせる表現がある。グリフィンはその間に積極的な意義を見出し、心的な生起と物的な生起が同じレベルで並列して相互に関係するそういった世界像をホワイトヘッドに見出そうとする。実際ホワイトヘッドのコスモロジーの「経験の活動」としての現実的生起 (actual entity)は一般的な解釈によれば微細なものとされる。そしてすべては心的-物的の両方を持つ双極性を持つのであり、通常心的とされる生起はその「心的」な性格が強く、脳の電磁的生起は物的な生起がほとんどを占めているものだとするのである。

このようなホワイトヘッド像をバジールはデイヴィッドソンの「法則なき一元論 (anomalous monism)」と比較しながら論じている。ホワイトヘッドはある意味でデイヴィッドソンと同じく一元論と言える。ただしデイヴィッドソンの一元論は物理主義の立場から、物的な出来事のみであったが、ホワイトヘッドは違う。先に述べたようにすべては心的-物的の双極性を有するがゆえに、心的な部分が強ければ心的とされ

る一方物的な部分が強い—「程度が低い」ものは物的とされる。従って因果関係—生起同士の関係は全てが厳格な法則下にあるのではない。その意味で全ての生起が厳密に言えば程度の差はあれ「法則なき」ということになる。最も通常の「物的」生起はこの程度が非常に小さいため実際には法則下にあるとして取り扱えるのである。これはホワイトヘッドが自然法則の必然性を否定している一現にある自然法則はある「宇宙時期 (cosmic epoch)」における偶然的関係に過ぎないという考え方と一致している。

もっともこういった考え方に対して、キムは物理主義の立場から強く批判している。彼は物理主義として物理的領域における因果的閉包性を主張して物的なものとの因果性を否定する。むしろそういった微細な部分に心的な因果性を認めることでどのような利点があるのかということに疑問を呈するとともに、最下層の事物に心性を認めるという点で創発ですらない、と批判する。

しかしわれわれはここでホワイトヘッドの汎心論を、脳髄レベルの物的な生起と同じレベルでとらえる必要があるのかということを考えるべきであろう。心的なものとの利点を認めるとするならば、それが必要とされる場面、巨視的なレベルでの生起を考えるべきであろう。実際我々は椅子を知覚するのであって、椅子を構成する原子や分子を知覚するのではない。この点はギブソンが「入れ子 (nesting)」を認めたことに通じる。そして経験する、心と関係するのであるならば、その事物と心は何らかの同じレベルにあるとして、双極性を巨視的なものに認めることもそれほどおかしいことではないかもしれない。むしろそういった巨視的なものと微細なものとの双方を認めることに、彼の汎心論の意義があるのかもしれない。むしろ物理主義を、微視的なレベルでの探求における有効な方法とすることで汎心論との両立が可能となるかもしれない。

#### 参考文献

- Basile, P. (2005) "Whitehead's Ontology and Davidson's Anomalous Monism" in *Process Studies* vol.34.1, 2005, pp.3-9.
- (2010) "Materialist vs. Panexperientialist Physicalism: Where Do We Stand?" In *Process Studies* vol. 39.2, 2010, pp.264-284.
- Griffin, D. R. (1999a) "Materialist and Panexperientialist Physicalism" in *Process Studies* vol. 28. 1-2, 1999, pp.4-27.
- (1999b) "Reply to Jaegwon Kim" in *Process Studies* vol. 28. 1-2, 1999, pp.35-36.
- Kim, J. (1999) "Physicalism and Panexperientialism: Response to David Ray Griffen" in *Process Studies* vol. 28. 1-2, pp.28-34.
- McHenry, L. B. (1995) "Whitehead's Pansychism as the Subjectivity of Prehension" in *Process Studies*. Vol. 24, pp.1-14.
- Whitehead, A.N. (1967/1925) *Science and the Modern World*, New York : The Free Press. 上田泰治他 (訳)、『科学と近代世界』[ホワイトヘッド著作集第六巻]1981, 松籟社
- (1978/1929) *Process and Reality*, Corrected edition, New York: The Free Press. 平林康之 (訳)、『過程と実在』1,1981, 2,1983, みすず書房